

名古屋市守山区の *Mnais* 属カワトンボと才井戸流

高崎 保郎

〒465-0026 名古屋市名東区藤森一丁目14

Species of the genus *Mnais* (Calopterygidae) and Saiidonagare Spring of Moriyama-ku Nagoya City, Aichi Prefecture, Japan

Yasuo TAKASAKI

14, Fujimoriittyyome, Meito-ku, Nagoya, Aichi, 465-0026, Japan

はじめに

守山区は *Mnais* 属カワトンボの名古屋市における最後の拠り所と考えられる。同区における本属の分布と現況、才井戸流への飛来について考察する。

1. *Mnais* 属のカワトンボ

本邦の本属の種決定については、1950年代から長い間議論が続いたが、近年の核DNA解析手法により、ニホンカワトンボ *M. costalis* とアサヒナカワトンボ *M. pruinosa* の2種に落ち着いた。東海地方ではこの2種を産し、アサヒナカワトンボは低山帯、丘陵の溪流に、ニホンカワトンボはその下流の丘陵下部からそれに続く平地上端の川幅が広がり、やゝ緩流に棲み分けている。

2. 名古屋市における過去の記録

(1) ニホンカワトンボ

名古屋市東部丘陵に溪流が、丘陵下部や段丘とそれに続く平地上端に清冽な細流や小河川が存在していた戦前・戦後から1970年代始め頃までは、現在の市街地の状況からは考えられない千種区本山周辺、昭和区隼人町、同菊園町山崎川、東区大曾根町、中村区日比津町などを含む十数ヶ所からの記録があり、天白区天白町八事天白溪では最も遅く1972年頃までは棲息していた。守山区では次の記録がある。

大森町弁天洞 18-V-1942 3♂1♀ 山本悠紀夫

竜泉寺 29-IV-1954 2♂ 高崎保郎

同 5-V-1955 1♂ 稲葉 信

同 20-IV-1958 1♂1♀ 松井一郎

小幡 27-IV-1958 1♂ 同

同 3-V-1963 1♂2♀ 相田正人

竜泉寺とは寺院竜泉寺付近を指すのではなく、当時は現在の小幡緑地とその周辺一帯を広く示す呼称である。この辺りでは本種は普通に産した。

(2) アサヒナカワトンボ

溪流性の本種は流石に昔でも市内中央では見当たらない。全て守山区の記録で

吉根 20-IV-1958 1♀ 松井一郎

東谷山 29-V-1983 1♀ 安藤 尚

下志段味 31-V-1986 2♂ 同

などである。

3. 現在の棲息状況

(1) ニホンカワトンボ

丘陵下端からそれに接する平地を棲息の場とする本種は、アサヒナカワトンボに比べ従来は市内の産地が多かったが、近年の開発、水域の汚濁が激しいこの地帯での棲息は皆無となり、環境破壊の影響がより少ない低山、丘陵の流れに依存するアサヒナカワトンボの方が残存する状況となった。例えば長久手市では丘陵下端から平地を流れる香流川とその上部の支流一ノ井川に本種は棲息したが、1980年代後半をもって絶滅し、アサヒナカワトンボは今も三ヶ峰丘陵などの細流に普通に残存する。

守山区でもこの傾向は例外でなく、ニホンカワトンボは1982年に実施された「志段味地区自然環境調査」や

その後の2006年までのデータに基づく「新修名古屋市史」など公式記録にも新たに分布が加わることはなかった。

本種は低山、丘陵の湧水、表流水を起源とする清冽な流れの下流に棲息し、今時の余りきれいな水ではない丘陵のため池起源の流れには産しない。守山区の池起源の小河川の例は白沢川の下流部分、長戸川、野添川、大矢川などである。笕池を発する野添川は庄内川合流前ではセスジイトトンボ、キイロサナエを産し、上流は如何にもニホンカワトンボが棲息しそうな環境が続くが、やはり本種を見ない。

現時点で区内で定着しているのは東谷山南麓のアサヒナカワトンボが産する溪流の下流の短いが清澄な流れだけである。ここでの至近の記録は

上志段味東谷 4-V-2018 1♀撮影 長谷川直之
(図1)



図1. ニホンカワトンボ♀, 上志段味東谷, 2018.5.4, 長谷川直之撮影



図3. 東谷山南麓登山口、道の奥左林内に溪流がある, 2018.7.27

である。2018年6月及び7月若齢幼虫をこの流れで探したが得られなかった(図2)。

(2) アサヒナカワトンボ

ア. 東谷山南麓の瀬戸市との境を流れる溪流に從來から安定的に多産する。当地は愛知県の「東谷山南東部野生動植物保護地区」に指定されているので今後も安泰である(図3)。至近の記録は

上志段味東谷東谷山 11-V-2018 3♂撮影 高崎保郎(図4)

イ. 現在も丘陵の樹林塊を残す地区である吉根太鼓ヶ根西端の階子田に所在する至来川源流の溪流に普通に産する。ここは当面開発されそうな様子はない(図5)。至近の記録は

吉根階子田至来川 1-V-2018 4♂ 高崎保郎



図2. ニホンカワトンボ定着地 上志段味東谷, 上部は日当中・下流は林内, 2018.7.27



図4. 東谷山のアサヒナカワトンボ♂, 2018.5.11



図5. 至来川源流, 2018.5.1



図6. 才井戸流, 2018.5.16

(3) 丘陵樹林を集水域とする溪流やそれに続く細流, 小河川が残存する場所は現在の守山区では限られる. 小幡緑地やその周囲, 大森八竜二の野鳥観察の森のいずれもそれらしい水路はあるが水量が充分でなく枯渇気味でカワトンボ類を養える状態とは思われない. 観察の森に続く下流の水生園はフェンスで囲い立入禁止なので調査もできないが, 湿生草本が繁茂する平坦な湿地の様で, 棲息種表示看板も普通種のキイトンボ, オニヤンマ, ハラビロトンボだけでカワトンボ類の表示はない.

強いて言えば守山区の自然把握を阻害している吉根と上志段味地内に所在するゴルフ場内に適所が存在するかどうかである.

(4) 尚, 比較的近年の断片的な記録として, 下志段味の改修前の長戸川の源流部と, 川東山の庄内川堤外地にある用水でニホンカワトンボが発見されたことがあるとのことである. 改修後の長戸川は本種が棲息可能な状態でなく, 川東山の例は本川からの羽化個体の飛来と推定される. いずれも現時点では定着とは認められない (清水私信, 2018).

4. 才井戸流における両種の出現

才井戸流は中志段味の庄内川堤防近く守山高校の南に位置する河岸段丘低部の低湿地で, 中心になるのは段丘崖下からの湧水由来の清澄な希少水生植物が生育する小流である (図6). この川からの発生でないが, 経年的



図7. 才井戸流に飛来したニホンカワトンボ♂, 2017.4.30, 長谷川直之撮影

にオオカワトンボとアサヒナカワトンボがここで発見撮影されている.

2014年アサヒナカワトンボ1♂成熟 (長谷川)

2017年ニホンカワトンボ1♂未熟 (長谷川・清水)
(図7)

2017年アサヒナカワトンボ1♂成熟 (清水)

2018年ニホンカワトンボ1♀成熟 (長谷川・清水)

同じ年に二人が別々に撮影したのは同一個体であり, これにより両種共一年に唯1頭ずつの飛来であると推定される.

では, 飛来源は何処であろうか. 現時点で才井戸流に定着していないことは個体数から見ても確実である. この場所はオオカワトンボとアサヒナカワトンボの定着産地である東谷山南麓区域からは2.5 km, アサヒナカワトンボの定着産地である至来川源流からは3.3 km隔たっ

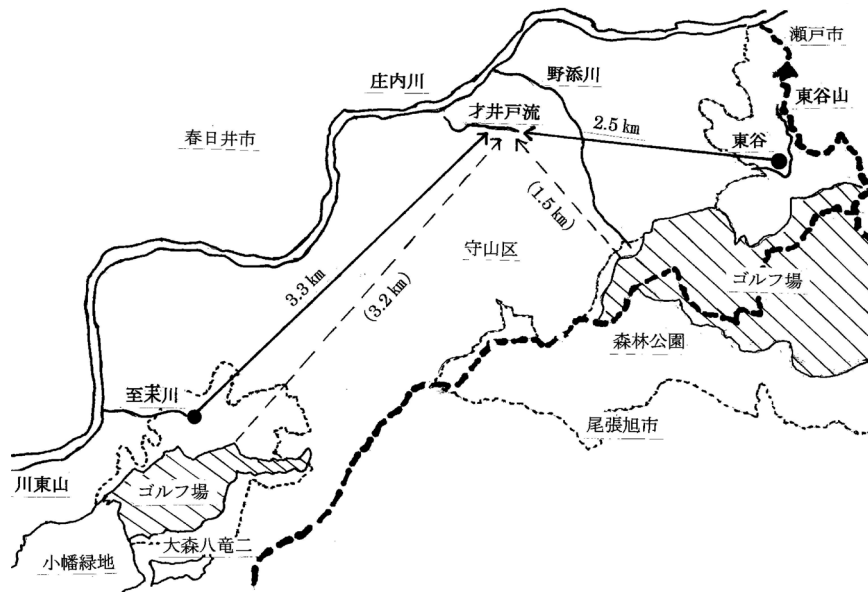


図8. 守山区の *Mnais* 属2種の定着地と才井戸流までの距離

ている。仮に上志段味と吉根のゴルフ場内に棲息地があったとすると、各々のゴルフ場境界から前者は1.5 km、後者は3.2 km隔たっている。産地との間の環境は概ね宅地、裸地、道路である。考え得る志段味丘陵地帯からの最も近いコリドーの役目を果たすのは最短距離500 m 東北方の野添川であるが、本川で両種が目撃された記録は全くない。距離とその間の環境から勘案すると両種棲息地からの移動分散可能性は少なからず厳しい（図8）。両種の移動分散能力についての報告は寡聞にして知らない。ニホンカワトンボが名古屋市東部に接する市で、主として二次林と一部裸地を経て4.5 km程移動したのではないかという推測1例を見るのみである（鶴殿, 2018）。より移動分散性が強いと考えられる同科別属のハグロトンボの自検例では名古屋市中区市街地で1.5 km、瀬戸市海上の森の溪流沿い上昇移動で800 mである。

もう一つの考え方は、耕地、草地、裸地を200 m隔たる庄内川の流下羽化個体の飛来である。古い記録ではあるが1958年に遙か下流の松川橋の庄内川で *Mnais* 属幼虫の採集記録がある。確証はないが距離から見ても庄内川由来の可能性の方が高いと考えられる。才井戸流は庄内川で羽化したカワトンボにとって一時の生活には好ましい環境である。

幼虫の出発点としては瀬戸市定光寺町、春日井市玉野

町辺りを下限に岐阜県にかけてである。中・大河川における幼虫の流下はサナエトンボ類でよく知られている。

むすび

市内の他区での本属の定着棲息は、既に絶滅が確認されていること、また、現在の自然環境から新しい発見は期待し得ず、やはり残存するのは守山区だけであろう。アサヒナカワトンボの保全された棲息地は将来に先ず不安はないが、ニホンカワトンボの定着地は流れに接する斜面上の道路沿いに改変の虞なしとしない不安定な状況下にある。才井戸流は環境的にアサヒナカワトンボは無理であるが、現況が変わらないかさらに改善されればオオカワトンボが将来定着する可能性も全く無い訳でもない。今暫くこの辺りの事を見守りつつ今後ニホンカワトンボについて市レッドリストに該当するか否かを考えてゆきたい。

謝辞

守山区在住で同区の蜻蛉相調査を実施しておられ、常々才井戸流始め同区のことを通報下さり、今回は写真を提供戴いた長谷川直之氏、守山区に係る諸情報を教示下さった清水典之氏、調査に協力下さった鶴殿清文氏に深甚の謝意を表する次第である。

文 献

- 安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人. 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp. 9-78. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.
- 高崎保郎. 2016. トンボ成虫の近距離移動分散雑録. *Pterobosca*, (22A): 14-15.
- 高崎保郎. 2018. 名古屋の蜻蛉目総括, 昔と今. なごやの生物多様性, 5: 93-111.
- 鵜殿清文. 2018. 愛知県日進市でニホンカワトンボを採集. 佳香蝶, 70(275): 49

